

向暑の候 宮崎県防衛協会青年部会宮崎支部会員の皆様には益々ご清福の段、大慶に存じます。また皆様には日頃より当支部運営に際し特段のご高配を賜り、感謝申し上げます次第です。

さて先月の自衛隊関連行事は17日に「宮崎県隊友会総会」がひまわり荘で、また28日は「宮崎県自衛隊退職者援護協力会総会」がホテルマリックスで開催され、出席致しました。

宮崎県も有効求人倍率が1を超えて退職者の雇用状況は好転しているようですが、出口が好調だと入り口が不調になると言う自衛官募集の宿命で、宮崎地本は大苦戦のようです。

河野知事が命名した「鮭の川上り作戦」を逐次継続中と植村本部長から伺いましたが、皆様の周辺に入隊適齢期の若者情報等があれば、何卒地方協力本部までご一報下さい。

ところで6/12にシンガポールで米朝首脳会談が開催され、その評価については様々なメディアを通して皆様の耳にも届いている事かと存じますが、トランプ大統領と金正恩委員長が作り笑いを浮かべながら握手をする姿に強烈な違和感を覚えたのは私一人ではないものと存じます。

「北朝鮮」の非核化を「朝鮮半島」の非核化とわざと読み違い、「リビア方式の非核化」を迫る米国に「段階的非核化」と逃げる北朝鮮のやり取りは、まさに「デジャブ」そのものでした。

米朝交渉継続中は米韓合同軍事演習を延期し、北朝鮮がミサイルを撃たぬならミサイル避難訓練を中止すると云う、日米韓政府の対応に不安を感じていた矢先に小川先生からいつものメルマガが届きましたので、以下に転載致します。

## ・国家なら避難訓練をやれ！

このほど、日本政府は**弾道ミサイルの避難訓練を中止**することを決めました。

「菅義偉官房長官は22日午前の会見で、北朝鮮の弾道ミサイル発射を想定した住民避難訓練を当面の間、中止すると発表した。菅氏は「(今月12日の)米朝首脳会談の成果の上に立ち、当面見合わせる」と述べ、**対話ムードの高まりに配慮**したことを明らかにした。」(6月22日朝日新聞)

これは国家として、**その場しのぎ**に明け暮れる政策しか持っていない証拠であり、その点から大いに**反省**しなければならないでしょう。

**弾道ミサイル防衛**は、確かに北朝鮮の弾道ミサイルの脅威に対して避難訓練を行うようになりましたが、もともと湾岸戦争におけるイスラエルのケースなどをもとに、**国民保護法が制定された時から必要性**が叫ばれていたものです。

そうであれば、北朝鮮の脅威をきっかけとして始まったとしても、そして**北朝鮮の脅威が存在しなくなったとしても、本来、国家が弾道ミサイルの脅威に対して備えるものとして訓練**が行われ、

避難施設が整備されていかななくてはならないと思います。

単に形だけの避難訓練を行うのではなく、現実の避難の実態に即した避難施設の整備などが行われなければ、国家として明確な方針を備えているとは言えないでしょう。

例えば、まず東京、大阪、福岡など大都市の中心部については、地下街、地下鉄の駅などを避難場所に使えるよう、入り口を必要な大きさに拡大したりする必要があります。そうしておかなければ、殺到した人々が折り重なって圧死する恐れがあります。

また、地下を備えている大都市のビルなどについては、すべてをシェルターとして使えるよう、表示をしなければなりません。

大都市中心部の学校、病院などの公共施設については、防爆、防弾について補強を行う必要があります。地方都市などの場合、大都市に準じた取り組みを県庁所在地から始めていきます。

農業地帯が攻撃目標になる可能性は低いものの、やはり主な道路の脇に大型の U 字溝を設置して、そこに潜り込めるようにしておくような対策が必要でしょう。

そうした施設が本当に機能するかどうか、そして現在の避難計画でよいのかどうかは、実動訓練を繰り返さなければ、検証できません。ちゃんと機能する計画や施設を備えるようになれば、例えば津波、火山の噴火、原子力事故などについても、有効な避難を実現することができると思うのです。地元から反対の声があるイージスアショアについても、同じ考え方が必要です。

本来、独立国家が備えなければならない弾道ミサイル対策として、明確に位置づけておく必要があります。北朝鮮の弾道ミサイルの脅威があるから、中国の弾道ミサイルの脅威があるから、あるいは、それらがなくなったからといったことで、導入したり、導入を断念したりと政府の姿勢が変わったり、それに対する批判が野党側から根拠もなく行われたりするというのでは、国家として平和と安全を実現していくための思想が存在しない証として、国民を挙げて反省しなければなりません。以上

私も小川先生のご意見に全く同感であり、常日頃「南海トラフ地震」に備えるように北朝鮮や中国のからの核弾道ミサイルにも、「常在戦場」の心づもりで対処する必要があると考えます。

いまそこにある「危機」や「猛暑？」から逃げず、皆様呉々もご自愛専一にお過ごし下さい。

平成30年7月1日

宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部長 小倉和彦